HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道方言のアクセント特徴に関する記述的研究 [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	DALLYN, THOMAS DANIEL
Citation	北海道大学. 博士(文学) 甲第12956号
Issue Date	2018-03-22
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/70210
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/4.0/
Type	theses (doctoral - abstract and summary of review)
Additional Information	There are other files related to this item in HUSCAP. Check the above URL.
File Information	Thomas_Daniel_Dallyn_abstract.pdf (論文内容の要旨)

Instructions for use

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：ダリン　トーマス　ダニエル

学位論文題名
北海道方言のアクセント特徴に関する記述的研究

・本論文の観点と方法

本論文は、北海道の道央、道北、道東、道南といった４つの方言地域において筆者自らが５年間にわたって行った言語調査のデータに基づいて、北海道方言のアクセント特徴を網羅して記述し、その特徴を明らかにすることを目的としているものである。共時的特性と通時的方向性という大きく二つの観点から考察を行っている。まず、共時的特性に関しては、北海道方言全体に共通するアクセント体系、アクセント規則、さらにアクセントの音声的具現を明らかにすることが目的である。続いて、地域と話者間におけるアクセントの違いを明らかにし、そこからアクセント変化の通時的な方向性を推測することを試みた。

・本論文の内容

本論文は、全７章から構成されるものである。まず、第１章では本研究の背景と目的について述べており、第２章では、北海道方言の歴史と成立、下位分類、そして日本語諸方言の中での位置づけに関して、先行研究に従いながらまとめた。また、本論文で使う用語の捉え方について説明している。第３章では、本論文執筆のために行った方言調査の内容、すなわち調査地域やインフォーマントの情報、調査方法、調査項目の表記法など、本研究の研究方法全般について述べている。

第４章では、北海道方言の音律特徴として、アクセント体系とアクセント規則、さらにアクセントの音声的実現といった共時的な特徴について記述している。調査データから抜粋したデータを用いて、北海道方言は式を持たない多形アクセント方言であり、弁別的な特徴はピッチの下降をもたらすアクセント核（下げ核）であることを確認した。アクセント単位におけるアクセント核の有無と位置は、単純和語名詞である場合、恣意的で予測不可能なものであると考えられるが、複合名詞、外来語、ならびに動詞・形容詞の活用形などにおけるアクセント核の有無と位置は、アクセント規則によって決まることを示した。概ね、これらのアクセント規則は全国共通語に一致するところが多いが、ここでは共通語には現れない活用形におけるアクセント型とその特徴について記述した。例えば、自発性を表す「サル」形（オササル、カカサルなど）の場合は、動詞の無核・有核を問わず、後接する「サ」にアクセント核を有することが分かり、サル形の活用におけるアクセントの交替型も確認できた。

一方、アクセント型における弁別的特徴が下げ核であるということは明らかでありながら、アクセント単位の音声実現形については明らかにできていない点があった。従来、音声的特徴についてはいくつかの解釈があり、主な相違点は語の冒頭部に現れるピッチの動きであった。従来の研究でも、東京方言と同じく、第１モーラから第２モーラにかけてピッチの上昇が現れることが報告されている。これは、語が「アクセント句」の頭に現れる場合に実現し、「句頭音調」と呼ばれているものである。一方、句頭においてアクセント単位の最初の２モーラの間にピッチの変動がなく同じ高さで発音される場合があることも報告されている。筆者は、アクセントの動的な解釈を用いて、これらを「非上昇調」として解釈した。「非上昇調」のパターンは、筆者の調査からも現れており、これらの調査データを考察した結果、非上昇調は無声阻害音から始まり、且つ無核語である場合、現れやすいことが判明できた。さらに、音響学的な分析からも非上昇調の存在とその現れる条件を支持する結果が得られた。

アクセント体系をはじめとするアクセントにおける音韻論的特徴は、北海道全地域がほぼ一致し

ていると考えられる。しかし、方言形のアクセント型や非上昇調の相対的な使用率などについては個人差が大きく現れ、こられについては第5章で取り上げている。

第5章では、地域と話者間における違いから４つのアクセント変化のプロセスを設定し、アクセント変化の通時的な方向性の推測を試みた。これら４つの変化プロセスのもっともはっきりした特徴は、１モーラ和語名詞において見られた。即ち、第Ⅱ類の名詞が⓪型から共通語と一致する②型に変化してきたことと、第Ⅳ・Ⅴ類における２モーラ目が広母音を含む語彙が②型から共通語と一致する①型に変化してきたことがそれである。各地において話者の年齢が低いほど全国共通語と一致するアクセント型を使用する傾向を示していることを明らかにした。これに関しては、共通語との接触による進行中の接触変化（共通語化）と解釈し、変化プロセスの４つの段階について説明している。３モーラ名詞は、全国共通語と比べて、②型が比較的多いという特徴が見られた。語類とアクセント型の対応関係においてはばらつきが多いものの、特定の語彙（主にⅣ・Ⅴ類）において明らかな共通語化の傾向が見られた。

一方、動詞は終止形においては話者間のヴァリエーションが少なく、第Ⅰ類（無核）と第Ⅱ類（有核）のアクセント型の対立が保たれていることがわかった。ただし、特定の付属語がつく場合は（ナガラ形、セル形）、動詞のアクセントと関係なく、後続の付属語のアクセントが実現するという興味深い現象が確認できた。結果として、これらの活用形においてはⅠ類動詞とⅡ類動詞の間のアクセント対立が中和してしまい、このような変化は、名詞アクセントにおける共通語化とは異なり、他の方言とも平行に進んでいるアクセント体系の単純化として解釈している。

形容詞アクセントも全体的に単純化傾向を示しており、形容詞の終止形では第Ⅰ類は規範の無核型と異なり、語幹の最後のモーラがアクセント核を担う有核型となっていたため、第Ⅰ類と第Ⅱ類の対立がほぼなくなり、中和している。終止形以外の活用形においては、第Ⅱ類は従来の語幹の次末モーラにアクセント核がくるパターンが衰退し、語幹末のモーラにアクセント核がくるパターンが優勢であることが確認できた。つまり、終止形と同様に、語幹末モーラにアクセント核が付与される傾向が強い。しかし、このような動詞・形容詞におけるアクセント型の変異は、話者の年齢との関連性を示さないため、通時的な方向性を判明することはできなかった。

第6章では、第4章と第5章における考察を補うため、２モーラ和語名詞のアクセント変化及び句頭音調の使用について定量的分析を行った。その結果、名詞アクセントにおいて、アクセント変化対象の語類は異なるペースで共通語化していくことや年齢の他に、話者が住む地域も共通語化の進む具合に関わることが分かり、与えられた年齢の話者に対して道南・道北より、道央・道東の方がアクセントの共通語化の進歩が速いことを浮き彫りにすることができた。このような差が、それぞれの地域の歴史的背景に由来する可能性があることも合わせて示唆している。

句頭音調に対する定量分析でも、非上昇が無声阻害音から始まる無核語に現れやすいことが確認でき、第4章における考察の妥当性を裏付ける結果が得られた。さらに、語頭モーラの母音と２モーラ目の子音も句頭における上昇調の有無に影響を与えることも指摘することができた。なお、句頭の無核語において上昇が実現しにくい理由としては、分節音による基本周波数（高さ）への影響が語頭モーラと第２モーラの間のピッチ差を縮めているためであると解釈している。

最後に第7章では、本論文の内容をまとめたうえで、特に動詞・形容詞におけるアクセントは変化のプロセスを推測することが難しかったこともあり、今後話者のアクセントを定期的に調べるパネル調査などを行う必要性があることや、本研究での成果を踏まえてさらに文末イントネーションなど文レベルでの韻律特徴へまで拡大して研究を続けたいなど今後の研究課題について述べて本論文を締めくくっている。